



子宮頸がんから、 大切な自分の身体を守ろう

いま、若い女性に増えている子宮頸がん。
その根絶をめざして治療と研究活動を続ける
産婦人科医、山崎健太郎先生をご紹介します。

長崎大学病院 産婦人科医

山崎 健太郎

Yamasaki Kentarou

1972年長崎県島原市生まれ。1997年長崎大学医学部卒業後、同大医学部産科婦人科学教室に入局。遺伝学の研究のため、2002年米国ペンシルベニア大学に留学。帰国後、大学や関連病院で臨床経験を積み、2007年から現職。分娩からがんの診療まで行っている。日本産科婦人科専門医、日本人類遺伝学専門医。



「妊娠・出産は、神秘的で感動的です」と山崎先生。4日前にとりあげたばかりの赤ちゃん。

「子宮頸がん」とは??

女性にしかない特別な臓器のひとつ「子宮」。子宮頸がんとは、子宮頸部と呼ばれる子宮の入り口付近にできるがんをいいます。「子宮頸がんになると、子宮を摘出しなければならぬ場合があります。若い女性が、将来の妊娠と出産の可能性を失えば、心身ともに大きな負担になります。また、がんが進行していた場合、生命を奪う恐れもあるのです」と、子宮頸がんの治療と、その研究をしている産婦人科医の山崎健太郎先生は言います。

「子宮頸がんは遺伝などに関係なく、性交経験のある女性なら誰でもなる可能性があり、特に若い女性に多いがんとして知られています」。最近のデータによると女性特有のがんの中では、乳がんに次いで2番目に発症数が多く、20〜30代においては、発症するすべてのがんの中で第1位を占めています。

なお、子宮にできるがんには、子宮体部にできる「子宮体がん」もあります。「子宮体がん」は50〜60代に多く、「子宮頸がん」とは原因や特徴も違うので、それぞれについて正しい知識が必要です(※次ページ①②③参照)。

「子宮頸がん」の原因

子宮頸がんは、HPV（ヒトパピローマウイルス）というウイルスが子宮頸部に感染して発症することがわかっています。ちなみに、この原因を明らかにしたドイツのハラルド・ツァ・ハウゼン博士は、2008年度のノーベル生理学医学賞を授与されました。これにより開発された予防ワクチンは、すでに世界100カ国以上で使用され、日本でも昨年12月から発売されています。

「皮膚と皮膚（粘膜）の接触によって感染するHPVは、もともと身体どこどこにでもいる、ありふれたウイルスです。すべての女性の約80%は、一生のうち一度は、子宮頸部に発がんのリスクのあるHPVに感染していると考えられています」。しかし、その多くは感染しても、免疫機構で排除され、子宮頸がんに進展するのは「くわすかなのです」。

HPVには100種類以上の型があり、そのうち子宮頸がんの原因となることが多いとされる型は15種類ほどです。

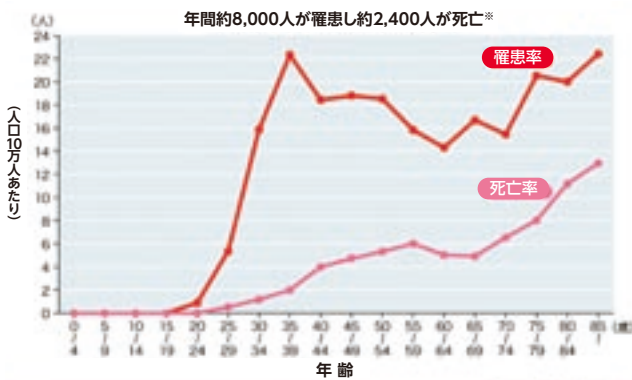
「なかでも、HPV16型とHPV18型と呼ばれる2種類は発がん性の高いタイプで、子宮頸がんを発症している20〜30代の約70〜80%から見つかっています。予防ワクチンも、この2つの型の感染に効果があるようにつくられています」。

予防できるがん

山崎先生の研究グループは、長崎県を中心に多くの女性の協力を得て、HPVの型を調べました。すると、HPV16型、HPV18型を除くと、欧米とは違う型が多いことがわかりました。「HPVは、国や地域によって多

② 子宮頸がんの罹患率と死亡率(日本人女性)

妊娠、出産が多い20〜30代にかけて急激に罹患率が増える。

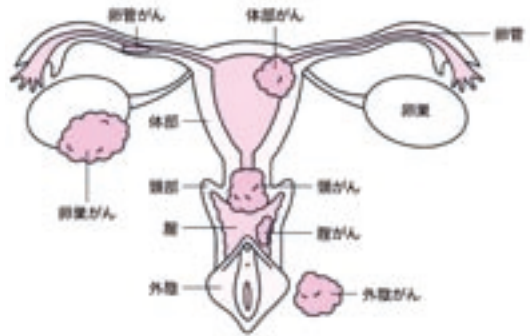


罹患率:2001年データ、死亡率2005年データ

国立がんセンターがん対策情報センター

※厚生労働科学研究費補助金 第3次対がん総合戦略研究事業 がん罹患・死亡動向の実態把握の研究 平成18年度 総括・分担研究報告書(主任研究者 祖父江友孝)、2007年4月公開

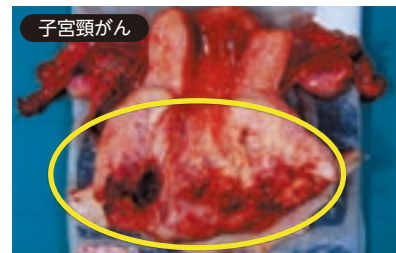
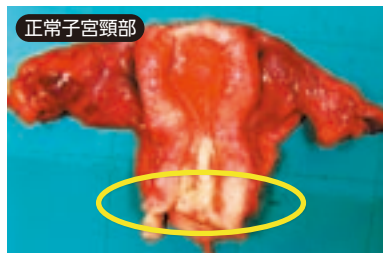
① 子宮頸がんとは?



- 子宮がんは、婦人科領域のがんの中で、乳がんに次いで発症頻度が高い。
- 子宮がんには、子宮頸部に発生する「子宮頸がん」と、子宮体部の子宮内膜に発生する子宮体がんがある。
- 子宮頸がんは、発がん性HPVの感染が原因、子宮体がんは、女性ホルモンの異常が原因と考えられている。

③ 正常子宮頸部と子宮頸がんの写真

子宮頸部は細く、妊娠中は固く閉じているが、分娩の時は拡大して産道になる。子宮頸がんは、がんが発生したため上部の子宮体部よりも大きくなっている。楕円で囲んだ部分はほとんどががん組織。(写真右)



い型が異なります。予防ワクチンは、HPV16型とHPV18型以外の型にもある程度、感染予防の効果があると考えられています。が完全に防ぐというわけではありません。子宮頸がんは発症しても初期には全く症状がないことが多く、自分では気づきにくいがんです。山崎先生は、予防ワクチンの接種に加え、定期的な子宮頸がん検診を受けることで、より確実に予防できると言います。「検診で、がんになる前に発見できれば、ほとんどの場合、子宮を摘出せずに治療することができます。欧米では10代後半以上の女性の約8割が検診を受けていますが、日本では2割程度と極めて低い状況です。20才を過ぎたら、ぜひ、受けましょ」。

生命の誕生に関わる医療

山崎先生の子宮頸がんに関する研究活動は、長崎大学病院での診察や治療、臨床実習生の教育などと並行して行われ、多忙な日々を送っています。

高度先進医療を提供する長崎大学病院には、むずかしい症例の患者さんが多く受診しますが、産婦人科も、然り、妊婦さんは、高度で専門性の高い治療を必要とするケースがほとんどです。「ハイリスクを乗り越え、赤ちゃんが無事に生まれてきたときは、ものすごくうれしい。何度体験しても大きな感動がありますね」と目を細めます。

産婦人科は、生命の誕生に向けて準備を整えていくという、ほかの科にはない特殊な医療を担っています。「お産は病気ではありません。また、意外に思われるか

もしませんが、なぜ、決まった日数で陣痛が起るのかなど、解明されていないことがたくさんあるのです」。

祖父の代から産婦人科医

医学部を卒業して13年目。複数の県内外の病院で、臨床の経験を積んできました。産婦人科医になったきっかけを問うと、「祖父も、父も産婦人科医で、そういう世界が身近にあったことが大きいと思います」という答え。幼い頃、開業医だった祖父の医院で過ごした記憶をたどりながら、「子ども心に、祖父の仕事に興味や関心を抱いていましたね」と言います。山崎先生にとって産婦人科医になることは、「ごく自然なことだったようです」。

しかし、医学部に入って何の迷いもなくこの道に進んだのかというと、そうでもありません。「学生時代は、基礎医学に興味があり、研究者になることも考えていました」。実は、そうした思いにはもう一つ理由が。「当時の私は、人とコミュニケーションをとるのが苦手で、患者さんと接する臨床は向いていないと思っていたのです」。

それでも、未解明なことの多い「お産」への関心と、持ち前のチャレンジ精神で臨床の道へ。毎日、患者さんや多くの医療スタッフと接しながら、ある日、ふと気付いたことがあります。「自分は人と接することは、嫌いじゃない。むしろ好きな方だ」。飛び込んでみて、初めて見えてきた本来の自分。「誰でもそうかもしれませんが、若い頃は、自分のことが良くわかってなかったです」。



経験豊富な医療スタッフが揃った長崎大学病院産婦人科。医師、看護師、助産師などが連携し、一人ひとりの患者さんを支える。



「お産のしくみは、驚くほどよくできています。解明されていないことも多く、興味はつきないですね」。



臨床実習生(医学部5年)に「胎児心拍モニター図の読み方」について講義中。病棟のベッドサイドでの指導も行つ。



妊婦さんの超音波検査。「元気になっているかな?」と、お腹の赤ちゃんの様子をうかがう山崎先生。スムーズに診られるようになるには、知識だけでなく経験も必要だ。

「苦手」の乗り越え方

性格は、「のんびり屋さん」「マイペース」。口調も穏やかで、慎重に言葉を選びながら話します。そのような性格だからこそ、緊急の処置や手術などで速やかな対応と決断を迫られることの多い仕事に対して、普段から、さまざまな症例ごとの対応をシミュレーションし、確実に自分のものにする努力を惜しみません。先輩の医師に教えを請い、よりよい方法を常に考えます。「苦手だと思つても、自分なりの工夫で必ず乗り越えられると思っています」。山崎先生は、そうした地道な努力を重ねて産婦人科医としての腕を磨き、信頼される医師へと成長したのです。

今後、さらに高度な専門性を養うための勉強を続けたいという山崎先生。現在、力を注いでいる子宮頸がんの研究については、感染する人と、しない人の免疫の違いなどの解明をめざし、合わせて予防のための啓発活動も続けていく予定です。「若いからといって、自分の身体をおろそかにしてはいけません。がんにつながるような異常が起つてからでは遅いのです。予防ワクチンと一年に一度の検診で、子宮頸がんを確実に予防しましょう」。

◎子宮頸がんの検診は、どこの産婦人科でも行っています。予防ワクチンは、どこの病院でも受けられますが、予約が必要な場合がありますので、事前に医療機関へお問い合わせください。